

ルカによる福音 7

地上最初の日撃者たち

ルカ 2 : 8-20

神の子が普通のオムツと粗末な布に包まれて、それも家畜用の洞穴の中で、粘土で固めた溝のような「餌入れ」の台か、岩肌の地べたに掘った窪みに寝かされているのを、その目で見て確かめた人たちの話です。

「羊飼い」は私たちにはなじみが無い上に、どうしても宗教画に描かれた美しい場面と結びついてしまいます。本当は、「羊飼い」と聞くと、その頃の人たちは顔を顰めたというか……少なくとも良い顔はしなかったそうです。実際、当時の裁判の習慣などを書いたものには、「法廷の証言からは羊飼いは除外される」という言葉も見られます。何でも、自分のものと他人のものと区別しない人たちだから、と言うのです。

そういう事情を知る人の中には、神の子誕生の最初の証人に選ばれたこの人たちは、そんな最低の人間とは程遠い、信仰的な、真面目な人々であったに違いない……と、いろいろ好意的な想像もします。

ベツレヘム近郊の羊というのは、当時の資料では、エルサレムの神殿で犠牲に献げられる神聖な儀式用の羊を、大祭司から委託されて飼育していたと、そんな記録も残っています。この記事に描かれる羊飼いたちは、その神殿御用達の業者として、身許も確かで品性も卑しからぬ庶民——痩せても枯れても「アブラハムの子」の端くれである……と。これは多分、その「法廷でも差別した」という記録に拘って、反対に弁護し過ぎなのかもしれません。

私の感じでは、ルカはそんなことは全く考えていなかったと思うのですが、やはりこの人たちが社会から重んじられない、最低の階級であったこ

とは、意識して書いていると思います。これは多分、パウロの「異邦人の福音」の最大の理解者だった、ルカ特有の考え方もかもしれませんが、身分や血筋から言っても、宗教的業績や誇りから言っても、社会が重要視しないような、平凡で卑しい（と見なされる）人々に、神様の目が注がれていて、そんな素朴な人たちを、最初の目撃者にお選びになったのだと言いたいルカの意図も、見逃せません。

1. 羊飼いたちへの天使の言葉 : 8-12.

8. その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。 9. すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。 10. 天使は言った。

その一群の羊飼いに突然、主の天使が近づいて、主の栄光が彼らをめぐり照らしたのです。この描写は旧約聖書以来の特徴的な表現で、眩い光があたりを射して、この人たちに神聖な畏れを覚えさせたのです。交替で見張りをしていた者たちだけでなく、仮眠していた者も起き出してきたでしょう。天使はこう告げました。

「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。 11. 今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。 12. あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」

「しるし」というのは、間違いなくその子を確認するための、変わった特徴ということだと思います。そんな場所に寝かされた新生児というのは他に無い！ これを手がかりにすれば、見間違いはない。

私たちは、この天使の言葉の中から、「救い主」と「メシア」という二つの

呼び名に注目します。まず、「メシア」という言葉は、旧約時代千年の約束と希望がこめられた称号でした。ヘンデルの「メサイア」は英語の“Messiah”を通してこの表記で知られます。この国の人たちが使った言葉で言えば、「マシーハー」 מָשִׁיחַ と発音したはずです。言葉の意味は「神が香油を注いで手ずから立てた聖なる方」——天の父が意図されたすべてを受け止めて、人に与えるべく最終的に来られる方です。

次に注目したいのは、「救い主」という語と、もう一つ、「主」という呼び名です。英語では“Savior”と“Lord”——この国では、神ご自身を指してしか使わなかった、聖なる名称です。例えば、イザヤ書にある「イスラエルの神よ、あなたは救いを与えられる」は、逐語的には口語訳のとおり、「イスラエルの神、救い主よ」（45：15）ですし、同じイザヤ書には、「わたしはあなたの神、主である。イスラエルの聖者、あなたの救い主である」（43：3）と宣言されています。神は「主」であると同時に「救い主」でもであると。主（キリオス κύριος）は神ご自身のこと、救い主（ソティール σωτήρ）は、死ぬべき人を生かして命を与える者です。

もちろん、さすが羊飼いたちも、その平凡な赤ちゃんの中に主なる神ご自身がおられるとか、これが人を生かそうとなさる神ご自身の手だということには、思い及ばなかったでしょうが、それ位の重みのある言葉をこの人たちは聞いて、証言したのです。

こういう内容を、何らかの形で受け止めることができたのは、旧約聖書と繋がり合った人たちでしょうから、「すべての民」というのも当然「この国の人」——救いを待ち望んできた人にだけ……と理解されたのでしょうか、ルカが語る文脈、ルカが見た視野の中では、やがて、そんな狭いものではないことが、はっきりしてくるのです。

2. 天の大軍の讚美 : 13-14.

13. すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

「天の大軍」は、列王記など（王上 22 : 19, 歴下 18 : 18）に見られる旧約聖書特有の表現で、無数の天使たちの群を（ ἡ στρατιὰ τοῦ οὐρανοῦ ）指して使われました。神のお傍に仕える全天使が、今伝えられた告知を裏書きして讚美したことを表わします。□

14. 「いと高きところには栄光、神にあれ、
地には平和、御心に適う人にあれ。」

ミサ曲の中で「グローリア」という部分が、これのラテン語訳です。“Gloria in excelsis Deo. Et in terra pax hominibus bonae voluntatis” これはルカの本文の通りですから、「アヴェ・マリア」などとは違い、力いっぱい歌って矛盾を感じない歌詞です。讚美歌 106 番は、このラテン語の 4 語を折り返しに使っていますが、原文はギリシャ語です。

Δόξα ἐν ὑψίστοις θεῷ καὶ ἐπὶ γῆς εἰρήνη ἐν ἀνθρώποις εὐδοκίας.

「平和」と訳している「イリーニ（ εἰρήνη ）」は、この国の本来の言葉では「シャローム（ οἰσῶ ）」でしょうから、こういう場合の「シャローム」は「神の救い」——人間として受け得る最高の祝福です。——織田講解「ローマ書の福音」2 講「なぜローマ書なのか」の 2 項を参照。

この詩の中心点は二つあります。今この正に皮肉な、みすぼらしい誕生… …と人間の目には映るような「神の子の誕生」のかたちで、神の偉大さの輝きが、天でその極限に達したという逆説。そして神がお与えになる「シャローム——最終的な救い」は、決して人間の目に満点に見える人ではなく、

神ご自身が良しと判断される人に及ぶという宣言です。これは、このあとルカの福音書の中で徐々に明らかにされることですが、いわば、パウロの「異邦人のための福音」の真髄です。

神が「平和」シャロームをお与えになるのは、「人間の心に適う」人々ではないのです。「私はこれだけ神の命令を守って、清く生きてきたのだ。異邦人や徴税人、罪人らと一緒にされてたまるか」と自身を持つ人ではない。反対に、罪に汚れた悲しい人、資格も自信も無い人でよい。イエス・キリストの十字架が自分のためであることに、目を開かれる人が、そのまま「御心に適う人」とされる……という使徒行伝やローマ書が語る福音の中心主題が、すでにここには掲げられています。

3. 羊飼いたちは自分の目で確かめて証言した : 15-20.

15. 天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。16. そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。

この羊飼いたちの素晴らしい点が二つあります。その一つは、この神聖なお告げを、そっとしておかなかったことです。信仰の世界の美しい夢のようなものにして、現実から切り離された別世界に「祭って」おいたりしないで、その中へとび込んだことです。とんで行って自分の目で確かめたことです。この人たちが見た光景は、ふつう美しい宗教画などに理想化されているような、快いものではなくて、最小限に表現しても、薄汚く、貧しいものだったでしょう。薄暗くて臭いのを我慢して、羊飼いたちは、世界の救い主、主なるキリストを見届けたのです。やはり、この人たちは「選ばれた目撃者」でありました。

17. その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。 18. 聞いた者は皆、羊飼いたちの話をも不思議に思った。

「不思議に思った」they wondered というのは、「魂げて呆れた」意味なのか、「感心した。感動した」意味なのか——ルカが使っている言葉 ἐθαύμασαν からは、どちらとも判断はできません。大部分の人は、聞いてただ呆れるだけだったのでしょう。ただ、この後に出るシメオンやアンナのような、ごく少数の人たちには、感動と驚きを与えたのでしょう。ルカは特に、ここに一人の例外があったことを付記します。

19. しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。——彼女には、十か月前の天使ガブリエルの言葉が、もう一度深い畏れと共に甦っていたのでしょう。

20. 羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

《まとめと勧め》

この羊飼いたち自身が、優れた鋭い人たちだったと言うより、この時の天使の言葉がどれだけ強烈であったかを、想像させます。私は、よく知られたイザヤの「主のしもべの歌」を連想するのです。（以下意訳）

「こんな情報をいったい誰が信じると言うのか！ 主の手がこんな現われ方をした例が、今までにあったか！ 多くの者が呆れた位、彼の外観は損なわれてお粗末で、見られたものではなかった。主が私たちに伝えさせた彼の姿はただの幼子だ。水気の無い地の根っこだ！」（53：1, 2）

「若枝のように」と訳される一句を「ただの幼子」とした理由は、七十人訳 LXX の ὡς παιδίον を参考にしました。「主が私たちに伝えさせた彼の姿は“ただの幼子”」——その“ただの幼子”の中に、この人たちは主の救いの手を明確に見届けて、喜んだというのです。

(1981/10/25)

《研究者のための注》

1. 「さてこの地方では」 ἐν τῇ χώρᾳ τῇ αὐτῇ (その同じ地方で) がどれほど厳密に「ベツレヘム」に言及するのは、よく分かりません。A.V.が in the same country, R.S.V.が in that region. 前田護郎訳は漠然と、「そのあたりに」としています。
2. 「野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた」から大体の季節感を読み取れるというのは Mc.Lean Gilmore の指摘ですが、もしそうであれば、前講の前置きで述べたように「12月25日ではあり得ない」こととなります。もっとも、レングストルフは「ベツレヘムの東のユダの荒野には低地があり、そこでは真冬も殆ど雪が降らない」と、慣例による降誕祭の日付を認めて説明するようです。
3. 「恐れるな」(10) μὴ φοβοῦ は現在命令法による禁止なので、「恐れることをやめよ」「もう恐れるな」の意味になります——織田文法 §273 の 1. a. (2)。恐れている者へ、その必要が無いことを知らせて恐れを捨てさせる言葉です。直接には主の栄光をまのあたりに見た羊飼いたちへの言葉ですが、間接的には私たち全て罪ある者への呼びかけと受け止めることができます。人は聖なる神の前に立つとき、罪を知って畏怖を覚えるものですが、イエスを迎えることによってだけ、この畏れから解放されるのです。
4. 「救い主 σωτήρ」と「主 κύριος」の旧約用例として引用したイザヤ書の箇所は、45:15 が ὁ θεὸς τοῦ Ἰσραὴλ σωτήρ (אֱלֹהֵי יִשְׂרָאֵל מוֹשִׁיעַ) と訳されており、同 43:3 は ἐγὼ ὁ κύριός σου, ὁ ἅγιος Ἰσραὴλ ὁ σώζων σε (אֲנִי יְהוָה אֱלֹהֶיךָ קְדוֹשׁ יִשְׂרָאֵל מוֹשִׁיעֶךָ)。後者は「あなたの救い主」で「あなた」が語尾に付いています。
5. 「天の大軍」の旧約出典は王上 22:19 と代下 18:18 で、どちらも LXX の訳語は ἡ στρατιὰ τοῦ οὐρανοῦ。ヘブライ語原典では קָל צְבָא הַשָּׁמַיִם です。「万軍の主」の「万軍の」は七十人訳 LXX では τῆς στρατιᾶς を使わず音訳語 σαβαώθ (צְבָאוֹת = צְבָא の複数形) または τῶν δυνάμεων が使われます。この「天の万軍」と訳される慣用語

- (κύριος σαβαώθ, κύριος τῶν δυνάμεων)には別の適用もあり、ステファノも使7:42で「異教の神々」の意味に τῆ στρατιᾶ τοῦ οὐρανοῦ を使いました。
6. 天の大軍の賛美の末尾を εὐδοκίας と読むか εὐδοκία と読むかの問題は、現在の本文批評学では事実上解決済みで、属格形の εὐδοκίας と読むのが正しいとされます。描写の属格 εὐδοκίας は ἀνθρώποις を修飾して「嘉納の人々」つまり「神のご満足なされる人々」の意味になります。しかし一部の写本に従って εὐδοκία と主格に読めば、A.V.のように goodwill toward men という意味になります。文学的には味わう価値はありますが、この読み方を採る人は殆ど無いでしょう。
 7. 主の「栄光」(ドクサ δόξα) はヘブライ語「カヴォード」קְבוֹד の訳語として使われます。この記事での「眩い光」とは別に、主の臨在の輝き、主の力の偉大さを表現します。可視的栄光を表わす語としては他に「シェヒナー」שְׁכִינָה がありますが、שְׁכִינָה という語自体は旧約本文には無く、後期ヘブライ語の語彙です。現代ヘブライ語辞典では“God” また “Divine Presence” と訳しています。
 8. 最後の前の段落で「意識」と断ったイザヤ書は、53:1,2に52:12を加味して自由に作文したものです。53:2の第1行にある וַיִּשָׁקוּ לְפִי יוֹנֵק לְפָנָיו を、七十人訳 LXX は ἀνηγγείλαμεν ἐναντίον αὐτοῦ ὡς παιδίον. と訳しました。元々 יוֹנֵק は יֶנֶק (吸う) の名詞「吸う者」suckling です。Br.Dr.Br.の辞典はこれを שָׁקַשׁ と同じと見て young shoot, sapling と訳しています。七十人訳 LXX の訳者たちは יוֹנֵק を樹液を吸うのでなく、母の胸から乳を吸う者として παιδίον と訳したのでしょうか。